

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web pageは
こちらから



令和4・5年度 幼児教育研究—2年次 研究発表会—

令和6年1月30日（火）午前9時30分～午後2時30分に令和4・5年度 幼児教育研究—2年次 研究発表会—を安中ひかりこども園で行いました。研究テーマは「かけがえのない一人ひとりを大切に～あったかさで心つながるひかりっこ～」です。午前は1時間15分公開保育（0～5歳児）を各保育室・ランチルームで行った後、「研究を通して感じたこと」をテーマにパネルディスカッションを行いました。午後からは園からの研究発表があり、その後、常磐会短期大学保田維久子非常勤講師から指導講評と「あったかさでつながる保育をめざして」をテーマにご講演をいただきました。



＜受講者感想＞

- 公開保育を見せていただき、子どもたち一人ひとりがとても穏やかで、自分の思いを出しながら遊びを楽しんでいると感じました。日頃からあたたかい雰囲気の中で育ててきたのだなと感じることができました。
- 質の高い就学前教育・保育を実現するにはマンパワー（数）が必要だと言われますが、数が足りているだけではだめで、自分のスキルを高めよう、チームとして力を発揮しようというような心のもちようが一番大事なのではないかと思いました。モチベーションを高める仕掛け作りや、同僚性を高める工夫が本当に素晴らしいなと思いました。
- 子どもたちの姿や保育者の姿から研究テーマを決められ、取り組んでこられた2年間の成果がとてもわかりやすく、私自身の姿や保育を振り返ることができた研究発表でした。
- 保田先生のご講演では『具体的に』というワードがすごく心に残りました。カリキュラムや毎日のねらいを定めるうえで『具体的に』と意識することで、自分の保育を掘り下げて見つめ直したり、次のやってみようと思える保育を見つけたりできると気づき、明日からの保育に活かしたいと思いました。
- 使える指導計画にすることの大切さについて学び、日頃書いている指導計画をもう一度見直してみようと思います。

『そだちのねっこ？』

～乳幼児期の遊びより～



【こども園大好き・友だち大好き・先生大好き ～子どもの笑顔は学びの芽生え～】

1月30日(火)、0～5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。



0歳児のクラスでは、新聞紙遊びをしていました。新聞紙を頭からかけてもらい喜び子どもたち。保育者の傍に寄ってきて、自ら寝転び“かけて～！”と目で訴えるA児に対して、「かけてもいいの？準備はいい？」と子どもの思いにすぐに応えていました。予想通りに、欲求を満たされた子どもは、大好きな保育者と見つめ、笑い合っていました。安心な場所・信頼できる保育者の存在があり、“こうしたらこうなる”という見通しがもてることで、自ら欲求する姿と笑顔につながっていると感じました。



1歳児のクラスでは、音楽に合わせて体を動かすことを楽しんでいました。動物になりきる中で、全身を使いながら保育者の真似をしようとしたり、表情や声で表現しようとしたりしている姿がとても可愛かったです。自分の体を自由自在に動かせることを楽しむ姿から、子どもたちの“やってみたい”気持ちが盛り上がる遊び環境を整えていました。「こんな環境を準備したらどう遊ぶかな？」と保育者がわくわくしながら実践することで、子どもの笑顔につながることもわかりました。



2歳児のクラスでは、病院ごっこを楽しんでいました。「鼻水が出るんです」「お腹が痛いです」という言葉に対して、「お熱はかりますね！」「お薬いりますか？」など、言葉のやりとりもしながら遊んでいました。生活の中での経験や見たことを再現しやすいように玩具の準備をしたり、保育者も患者役になりきって一緒に遊んだりしてイメージを共有できる工夫がありました。遊びが盛り上がってくると、自分の思いを伝えたい気持ちでいっぱいになっていました。「Bちゃん一緒にしよ！」「おんなじやな」など、顔を覗き込んで笑い合う姿がとても微笑ましく感じました。

3歳児のクラスでは、一生懸命に何かを作っているC児に、「何を作ってるの？」と問いかけました。C児は「パンダになりたいからお面を作ってるの」その横からD児が「私はパンダのえさを作ってるの」とすぐに返答があり、目的をもって遊んでいることがわかりました。なりたいものになりきるためのグッズをいろいろな素材から自分で選び、つくろうとする姿もありました。また、困った時はすぐ助けてくれる保育者の存在があることも、心の支えになっていました。さらに、困っている友だちに「どうしたん？」と声をかけて心配したり、「こういう風にしたかったん？」と気持ちに寄り添った言葉をかけたりするなど、あたたかい友だち同士のかかわりも見られました。



4歳児のクラスでは、忍者になって修行を楽しむ子どもたちの姿がありました。忍者になりきることで、少し苦手なことにも挑戦しようとしたり、友だちを励ましながら一緒に遊ぶことを楽しんだりしていました。しかし、思いの違いからのトラブルは付き物です。保育者が仲立ちをし、どちらの気持ちにも寄り添いながら話を進めることで「どんな思いでそういうことをしたのか」がわかり、“折り合い”をつけようとする子どもたちの心の動きを感じることがで

きました。子どもの浮かぬ表情や気持ちを和らげ、再び笑顔で遊び出せるように援助することも大事な保育者の役割であると思いました。

5歳児のクラスでは、友だちと一緒に『こま対決』や『ペープサートでお話づくり』『遊びに必要なものをつくる』など、ルールを決めたり、試行錯誤したりして自分たちで遊びを進めようとする姿がありました。「これ、こうしたらどう?」「いいやん!そうしょ!」など、友だちに認められることを繰り返しながら、徐々に友だちの思いも受け入れられるようになっていくと感じました。「〇〇ちゃん、一緒に遊ぼう!」「今日はこれするねん!」など、目的をもって遊び込む姿に育っていることが、子どもたちのまぶしい笑顔から感じられました。



それぞれの学年の育ちが引継がれ、積み重なっていることがわかりました。就学前教育・保育では、子どもたちの“やりたい”意欲を大切にすると同時に、子どもたちの思いを実現できるように“ねらい”をもって環境を構成し、保育者の援助をすることが求められます。子どもたちの『笑顔』は、『こども園大好き・友だち大好き・先生大好き』が含まれており、意欲や学びの芽生えにつながる一歩だと思えます。

これからも、発達段階に応じた遊びを通して、『健康・人間関係・環境・言葉・表現の5領域』や『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』に沿って、『そだちのねっこ』を発信していきます。また、乳幼児期の教育・保育が、小学校以降の学びにつながることも期待しています。

ICT担当者研修（小学校・中学校）②



令和6年1月22日（月）と1月29日（月）午後3時30分～午後5時にICT担当者研修②を行いました。講師は本センター山野元気指導主事から「プログラミング教育の必要性」について、その後大阪樟蔭女子大学今田晃一教授から「GIGAスクール及びプログラミング教育等推進について」というテーマで講義がありました。

<受講者感想>

- 「根拠をもって自分の考えを述べる」練習をしていかなければならないと感じている。「関心意欲」の評価の話の中で、「アール・八尾」をぜひ取り組んでいきたいと思った。加えて、ネクストGIGAと呼ばれる状況の中で、単に今までの活動をICTを置き換えただけのものではなく、ICTだからこそできる授業が求められていると感じた。今日紹介していただいた「テキシコー」を広めていきたいと思う。
- 接続詞が論理的な考えを書いたり、表現したりすることに大切であることを学びました。何気なく使っている接続詞であるが、いろいろな考え方を深めるために、自分自身も意識的に使っていこうと思う。また、授業等を通じて子どもたちにも伝えていければと思う。
- 「次の一手とひとひねり」が最も自身の課題意識にはまった。なぜなら、正に今、勤務校でロイロノートとTeamsの操作を身につけた先生方に「やりきった」感が滲んできているように思う。それで終わりじゃないぞ、と思いながら具体的な提案ができていなかった。今日学んだことを持ちかえり、校内で吟味したうえで学校全体の実践に繋げていきたい。

← 研修に使用したスライドの一部 ↓

プログラミング的思考

自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組合せが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号を、どのように組み合わせたらいいのか、記号の組合せをどのように改善していけば、より意図した活動に近づくのか、といったことを**論理的に考えていく力。**

文部科学省 プログラミング教育の導入 第2版より

5年経験者研修④

令和6年1月23日（火）午後3時～5時に5年経験者研修④を行いました。講師は本センター山野元気指導主事で、研修テーマは「組織づくりメンタリング【検証】」です。

■メンタリングを充実させるためのコツ・スキル

「問題の解決策や答えは、すべてその人の中にある」
適切な支援を行うことによって、相手のやる気や能力、可能性を引き出していこうという考え方

コーチング・マインド

- ① 相手の話をよく聴くスキル（傾聴）
- ② 相手を認めるスキル（承認）
- ③ 相手の答えを引き出すスキル（質問）

← 研修に使用したスライドの一部

②中堅教職員として、所属校で今後どのようなことに取り組もうと思いますか。

<視点>

- ・人材育成
- ・組織改善
- ・職場への貢献

1. 個人で	(10分)
2. グループで交流	(10分)
3. 全体で交流	(10分)

<受講者感想>

- ・中堅教職員として、これから自分がどのような心構えを持ち、行動していくべきか、たくさんの人の意見を聞いて、以前より明確になった。メンターとして、後輩教員に関わるだけでなく、時にはメンティとして先輩教員に相談し、関わることで、自分を起点として横のつながりを作っていきたいと思う。
- ・まずは、よい関係性を作ることが大切だと改めて感じた。これからも自分より経験年数の少ない先生とかかわることはたくさんあると思うので学校の雰囲気良くなるように発言や行動をしていきたい。
- ・グループで話し合った中で共通した思いは、教員が安心して活動できる場が必要ということだった。自分ができることは、「板書ツアー」などを企画してどの教員も学び合える環境を作ることだと思う。

初任者研修⑩

令和6年1月25日（木）午後3時～午後5時に初任者研修⑩を行いました。講師は本センター鈴木雅博指導主事で、研修テーマは「授業づくり【検証】」です。

●レポート (2) 実践事例について交流

どのようなねらいをもっていたか？

どのような発問を行ったのか？

子どもの反応はどうだったのか？

班で交流 (25分)

授業づくりについて成果と課題を明確にして → 今後の授業改善の方向性

班で話し合っってホワイトボードに整理してください

← 所属校での授業実践について交流しました

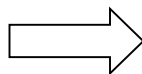
<受講者感想>

- ・授業の作り方は人それぞれだと感じた。その分グループワークを行うことによって、自分では思いつけないアイデアや考えを知ることができた。同じ初任の先生方からいただいたアイデアをはやくクラスに持ち帰り実践に活かしていきたい。
- ・教科や学年が異なっても、すべての児童に合わせた授業づくりを行うことの難しさは共通していると感じた。その中で、身近な場面を取り上げることや、楽しみやすい導入・学習活動を行うことなどの工夫をすることで、子どもが主体的に学ぶことができるようにすることが大切だと思う。

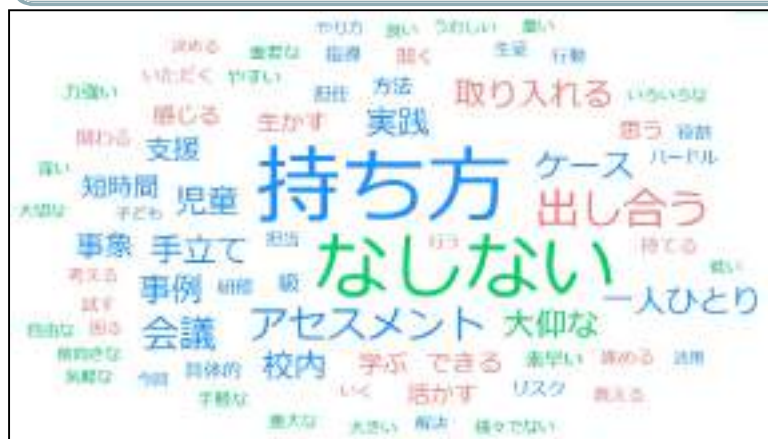
- 時間配分などの工夫の方法などについて話し合うことが出来た。また、交流する中で、普段の生徒の実態の様子から、ペアワークを取り入れたり、文章が書けるように手立てを準備したりした話を聞くことが出来たので、ぜひ自分の授業でも取り入れていきたいと思った。



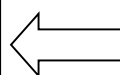
班ごとに話し合った内容を報告
(各班でホワイトボードにまとめたものをスクリーンに映し出しています)



通級指導教室担当者会（ブロック会⑩）



令和6年1月26日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室担当者会（ブロック会⑩）を行いました。講師は本センター辻佳与子指導主事で、研修テーマは「インシデント・プロセス法によるケース会議の紹介・実践」です。



受講者感想をテキストマイニングによって表示したもの

※インシデント・プロセス法（埼玉県総合教育センターHPより）

- マサチューセッツ工科大学（MIT）のピコズ教授夫妻により考案された事例研究法。
- 参加者には、はじめに「起こるべくして起こった問題行動（インシデント）」のみが提示される。参加者は事例提供者に一問一答式で質問することで、背景や原因となる情報を収集し、それをもとに問題を分析して、解決のための具体的方策を考えるという事例研究法。

※テキストマイニング

- 文字列を対象としたデータマイニングのことである。通常の文章からなるデータを単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向、時系列などを解析することで有用な情報を取り出す、テキストデータの分析方法である。

マイニング（＝mining 採掘）、多く使われた語句が大きく中央に表示されます。

<受講者感想>

- 今回教えていただいたインシデント・プロセス法によるケース会議を校内で提案してみたい。意見交流ではデメリットについての指摘もあったが、そのことも分かったうえで、試行し最終的には子どものメリットになるように取り組んでいきたい。
- 今回初めて見るケース会議の方法について提案していただき、実際の事例をもとに体験することでどのように進めていくのかがよくわかった。時間を決めることができるので実施のハードルが低いと感じた。ただ重大な事案についてはきっちりしたアセスメントが必要である。
- 必要なメンバーがサクッと集まってできれば素晴らしいと感じた。担任、もしくは通級指導教室担当が抱え込まないで、たとえ一つでも役割を持って会議に臨むことができれば、課題も共通認識でき、視点も広がり、チームでやっているという安心感が生まれるのが大きいと思う。

研究協力員全体会②成果報告会

報告順	
A分科会 大研教室1	B分科会 大研教室2
① 事務部会	① 人権教育部会
② 体育科部会	② 食育部会
③ 理科部会	③ 外国語部会
④ 算数・数学科部会	④ 道徳部会
⑤ 特別支援教育部会	⑤ 社会科部会
⑥ 情報教育部会	⑥ 国語科部会
⑦ 生活・総合部会	

令和6年1月31日（水）午後3時30分～午後5時に研究協力員全体会②成果報告会を行いました。全体会の内容を「研究紀要」（研究報告冊子）としてデータ化します。八尾市立学校の教員がオンデマンドで閲覧できるようにして、今後の教育活動に活かしていきます。

← 当日の報告順です



B分科会「食育部会」報告 →

<受講者感想>

A分科会

- ① 「事務部会」報告について
 - ・共同実施について、取り組みが始まってからこれまでの積み重ねにより、成果が上がってきていることがわかった。
- ② 「体育科部会」報告について
 - ・子どもたちが互いに楽しく学んでいる様子や笑顔が良かったと思う。
- ③ 「理科部会」の報告
 - ・小中連携で、何を教えるのかを明確にし、授業を主体的に受けさせることでより理解が進むことがわかった。
- ④ 「算数・数学科部会」報告について
 - ・実物を与えることで、自由な発想が実現し、意見がたくさん出てきそうで、生徒が楽しみながら学習できそうだった。
- ⑤ 「特別支援教育部会」報告について
 - ・視覚的に活動の見通しを持つことや認め合うための取り組みは通常学級でも大切にしたいことだと思った。
- ⑥ 「情報教育部会」報告について
 - ・教員の負担軽減についての取り組みが聞けてよかった。
- ⑦ 「生活・総合部会」報告について
 - ・エネルギー教育のコンテンツに興味を持った。ホタルの繁殖がすごいと思った。環境問題へのつながりが素晴らしいと思う。

B分科会

- ① 「人権教育部会」報告について
 - ・改めて部落問題学習の大切さや、部落問題で学ぶ大切さも感じました。このような実践事例を広めることが八尾市の子どもたちの人権感覚が高まり、みんなの人権が守られる社会に繋がると思う。
- ② 「食育部会」報告について
 - ・八尾の先生で子どものためにポン菓子の機械を作った人がいることは、地域の歴史としても興味深いものだった。地域の先人を知り、子どもたちが自分の地域に誇りが持てると思う。
- ③ 「外国語部会」報告について
 - ・公開授業の報告にあったように、発言に対して即興的に反応することは、英語を話す以前に、コミュニケーションの根幹になると思う。子どもたちには、うまく話せなくてもいいので、コ

コミュニケーションをとろうとすることを大事にしてほしいと思う。

④ 「道徳部会」報告について

- 子どもたちの意見を活発にするためには書く作業の配分が難しいと実感していた。発問に関しては授業をするたびに、また子どもたちの反応によって何が適切な発問かが変わっていくので研究のしがいがあると思う。今後自分でも意識して研究していきたい。

⑤ 「社会科部会」報告について

- 自己調整について悩むことがある。報告にもあったように、もっと単元全体を見通せるようにし、その中で自分で学習に強弱をつけながら学んでいけるような構成を考えていきたいと思う。

⑥ 「国語科部会」報告について

- 対話的な授業をするためにどんな発問の投げかけをすればいいか具体的に提示していただき大いに参考になった。自分の授業の中でも取り入れていきたい。

通級指導教室担当者会⑪



令和6年2月9日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室担当者会⑪を行いました。講師は一般社団法人発達支援ルーム「まなび」今村佐智子理事で、研修テーマは「算数・数学の指導②」です。

← 研修で使用したスライドの一部

＜受講者感想＞

- この子は今何に困っているのかしっかりとアセスメントをとることを忘れずに地に足をつけて取りこんでいけたらいいと思う。
- 「自分に合った手だてを見つける」という言葉が印象に残った。教師のやり方を子どもたちに押し付けてしまいがちであるが、解き方は人それぞれのやり方があるので、その子に合った解き方を見つけていくことが大切だと思った。
- 最後に伝えていただいた、通級指導は低学年であればあるほど正しいアセスメントを行い、不登校児童を増やさないという熱い思いを受け継ぎたいと思う。

初任者研修⑱閉講式

セルフマネジメント		
マイポートフォリオ（各期の計画と振り返り）		
年度当初	8月頃	2月頃
目標とする教職目標（長期目標） 「子どもの笑顔のために行動できる先生」 ・授業が分かりやすい ・一人一人の子どもの気持ちに配慮できる	自己の実践を振り返って成果と課題 ・学期に工夫を加えることで子どもの発言が増えたが、一人一人に配慮しながら、フラスや授業をまとめられていない。	自己の実践を振り返って成果と課題
この1年でつきたい力（中期目標） ・主体的な授業づくり ・子どもの行動を観察する力	後期に向けて取り組みたいこと（短期目標） ・子どもが考え、表現できる「ワークシート」の作成 ・学習会に積極的に参加 ・子どもの観察記録をつける	2年度に向けて取り組みたいこと（中期目標） 年度当初からより具体的な取り組み目標を

令和6年2月15日（木）午後3時～午後5時に初任者研修⑱閉講式を行いました。研修では本センター鈴木雅博指導主事をファシリテーターとして、1年間の振り返りとこれからの目標等について班別討議・全体交流を行いました。研修の最後に閉講式として本センター澤田玲子指導員より「期待すること」と題して講話を行い、本センター打抜真由美所長より「2年目を迎えるにあたって」と題した講話を行いました。いずれの講話も自身の経験に基づき悩みながら成長していったことや、何事も一人で抱え込まず周囲に相談していくように等の温かいメッセージが込められていました。

↑ 研修に使用したスライドの一部

<受講者感想>

○1年間を通じた自分の成長について

- できるようになったことは、子ども理解ができるようになったと感じる。また、4月当初は、児童の実態が十分理解できず、ルールが曖昧であったり、自分自身も理解できていなかった部分もあったが、子どもたちと長い時間過ごすことで、一緒にルールを考えたり、つくっていったりすることができた。また、先輩教員ともたくさん関わっていただいて、アドバイスを頂いたり、助けて下さったりしていただいた。
- 生徒指導に参加させていただくことが多く、指導の仕方について考えることがたくさんあった。そして、指導の場面だけでなく、普段からの生徒との信頼関係が指導の際には大切であることを特に感じた。信頼関係を築いておくことで、生徒の心に響く指導ができると思う。
- それぞれの児童に合わせて関わり方や指導の方法や学習の方法を変えるために試行錯誤し考えたことや、先輩の先生方に指導を仰いだことが最も自分の成長につながったと感じている。子どもへの適切な叱り方など、まだまだ分からない部分はあるが引き続き先輩の先生方の姿を手本とし自分自身の成長へとつなげていきたいと思う。

○2年目は、どのような教員をめざしますか。

- よりよい授業づくりを行うため、発達段階に応じた指導方法を取り入れ、教材研究に励みたい。また、子どもたちが相談しやすい雰囲気づくりをこれからも研究し、取り組んでいきたい。
- 「分かりやすい授業」ができるようになりたいと思う。そのためにも日々自分の授業を振り返り、改善していく習慣をつけたい。また、今年度は初めての担任でわからないことが多かったが、生徒同士のつながりを深められるような集団作りができるようにもなりたい。
- 子どもの自主性や主体性にフォーカスした指導や授業ができる教員を目指したい。日頃の指導では、こちらが伝えたいことを一方的に伝えるのではなく、子どもたちからどうしたらよかったのか、次はどう行動すべきかをしっかり考えさせたい。授業では、子どもたちが積極的に参加し、子どもたち同士が対話しながら考えられるように、発問を工夫する。そのために、たくさん先輩方の授業を参観し、アドバイスを頂きたいと思う。

小学校一斉見学会

令和6年2月21日（水）午前中に市内全27の小学校と義務教育学校で一斉見学会を行いました。これは令和6年4月に入学予定の子どもたちとその保護者へ向けて入学する学校の様子を知ってもらうことが目的です。教室での授業の様子や体育館でのレクリエーションなどを見学して、小学校入学へ向けたイメージを膨らませてもらうことが出来ました。

< 当日のながれ >

((例) 第2校時でのタイムスケジュール)

9:15	小学校での受付
9:40	1年生の授業見学(体験)
10:25	授業見学(体験) 終了後、下校

※ 学校によって体験の時間、内容が異なります。

当日の開催時間、実施内容、持ち物、集合時間などの詳細については、お子さまが入学される小学校の入学説明会にてお知らせします。

「小学校一斉見学会」ポスターの一部

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は2月から3月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「指導と評価」（日本教育評価研究会）3月号

- ・特集1 学習評価（1）学習評価の目的—形成的評価と総括的評価×妥当性・信頼性
- ・特集2 子どもの性被害・性加害

「道徳教育」（明治図書）3月号

- ・特集 あの先生の道徳授業探訪記

「こころの科学」（日本評論社）3月号

- ・特別企画 「こころの病気」と呼ぶ前に—診断とは何だろうか

「こころの科学」（日本評論社）special issue 2024

- ・心理臨床と政治

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）3月号

- ・特集1 通知表を渡すときのちょっとした工夫
- ・特集2 新年度の“ギャップ”を軽減するために

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）3月号

- ・特集 ウェルビーイングの向上を目指した教育実践
～特別支援教育の「これから」を描く！～

「初等教育資料」（文部科学省教育課程課・幼児教育課編集・東洋館出版社）3月号

- ・特集Ⅰ 持続可能な社会の担い手の育成
- ・特集Ⅱ 学習指導要領における指導のポイント
運動遊びの学習指導の改善・充実

「中等教育資料」（文部科学省教育課程課編集・学事出版）3月号

- ・特集 高等学校における資質・能力の育成に向けた教育活動の充実③
<家庭、情報、総合的な探究の時間、特別活動>

教育科学「国語教育」（明治図書）3月号

- ・特集 楽しく力がつく！ 国語あそびベストセレクション

教育科学「社会科教育」（明治図書）3月号

- ・特集 今すぐ使いたくなる！ 社会科ICT&AI活用アイデア

「社会科教育」（明治図書）3月号の特集は上記のとおりです。巻頭に香川大学の神野幸隆准教授の「今すぐ使いたくなる！社会科ICT&AI活用の手だて」という文書を掲載しています。まず最初に「『ChatGPT』をはじめ生成AIが実社会で利用領域を広げて」いますが、「生成系AIは全体の構成を把握したり、関連付けしたりする思考及び計算が苦手である。」との指摘があります。AIは万能ではなく、得意なこと不得意なことを精査して

有効に使っていかねばならない、とのことです。そんな中で教師の役割は「学習者の好奇心やモチベーションを引き出したり、創造力を養ったり」していくことのようにです。また、「AIは自発的に問いを設定することはできない。問いは、研究活動での体験や失敗及び不便さ等通じて生まれることが多い。」と述べられています。つまりAIは（実）体験をしないということです。では何で動くのかというと「プロンプト」と呼ばれる「指令や問いかけ」の文字列です。このプロンプトが的確であれば返答も的確なのですが、これを上手に行うにはそれなりの訓練が必要です。そもそもAIは「幻覚（ハルシネーション）」と呼ばれる事実とは異なることや文脈と無関係な内容などが出力されることがあるそうです。AIの返答内容を吟味し、ファクトチェックを行う必要があります。これが難しいと思うのですが、著者は「日本ファクトチェックセンター（JFC）」を紹介されていますが、すべてをそこで行うことは不可能です。むしろ教師自身が情報に対して常にファクトチェックを意識していかなければなりません。これについて私はユネスコが策定し、広く実施を呼びかけている「教師のためのメディア情報リテラシー教育カリキュラム：Media and Information Literacy Curriculum for Teachers」が参考になると思います。詳しくは「メディアリテラシー」（時事通信社）をご覧ください。最後に著者は、日本は「（鉄腕アトム、鉄人28号など）ロボット受容度が高い」と述べられています。何でも新しいものが入ってきたら否定的な先生がいるが、結局はうまく使っていけるとの見解です。しかし、正義の味方鉄人28号も、リモコンを敵に奪われて暴れまわる姿を知っている世代としては、あくまで慎重な対応を心掛けていきたいと思います。ロボットは使い方次第で善にも悪にもなるということです。今が考え時ではないでしょうか。

（葭仲）